
負の惨劇

kai

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

負の惨劇

【著者名】

ZZマーク

ZZ269Z

【作者名】

ka-i

【あらすじ】

ある日、ここ箱庭学園に転校して来た黒田暗示。^{くろだあいじ。}暗示は学園長に呼び出されてある依頼をされる・・・

ハジマツ（前書き）

皆さんおはようございます、こんばんは、こんばんは。どうも k a i です。興味本位で書いてみました。少し短いですが、承ください

ハジマリ

主人公になれるのかどうか分からぬ人

黒田暗示
くろだあんじ

今までの人生で人と話した事がないくらいやつ

暗示 side

ようし・・・どう自分を紹介するのか分からぬんでは少年漫画みたいな感じで紹介するか

よつ、オレの名前は黒田暗示だ。ひょんな事からここ箱庭学園に入学することになった。

それにしてもよく入れたな、オレは学力全然ないのに受かったからな、まあいいやオレは今度こそ友達を作るぞ！！

とまあこんな感じかな？自己紹介も終わつたし、じゃあ行くか
ちなみにオレのクラスは1年マイナス13組だ。
オレは、まず学園長さんにアイサツしに行つた

なぜ学園長の所に行くかって？

それはね、オレにも分からないさ
まあ、とりあえず部屋の前に来た

オレは、周りに誰もいないことを確認するとドアをノックし

「失礼します」

そう言つて中に入つてみると
不知火袴と安心院さんがいた
え？何で知つてるかつて？

それはね、オレのスキル
異世界知パラレルズノウというのがあってね
オレは、別の世界に行くことができて知らない人の情報をデータと
して脳に記憶してるんだよ

「そこに座つてください」

オレは、イスに座つて笑顔で言った

「何だよ老人二人がオレに用つて」

「おいおい老人とは言つてくれるね〜」

安心院さんがうすら笑いを浮かべて言った
いつ見ても何考えてるのか分からない人だ
その時、袴がオレにこう言つた

「君を呼んだのは他でもありません…黒神めだかを生徒会長の
座から引きずり下ろして欲しいのです」

企画

何考えているんだ、「」のジジイは

「つまりオレを、悪役にしたい訳か・・・」

「そういうことです」

「え～オレ絶対負けますよ」

「何言つてるんだよ、君の異世界バラレルワールド知があれば相手の弱点なんて簡単に分かるだろ」

「いや～」のスキルは、情報を手に入れる力で戦闘向きじゃないんですよ

「大丈夫、君は他にもスキルを所持している」と「」とは知つてゐから

「な・・・何の事ですか～？」

「じりばっくれるなよ、君のことは学園長から全て聞いてる」

隠しても無駄みたいだな

「はいはい、分かりました」

「では、教室に戻つてください」

オレは、笑顔で口を開いた

「はーい、あつ、あれと部屋に生徒入れるのやめてくれませんか？
わざわざかりつけとつしくて仕方なかつたんですね」

オレは、やうやく部屋から出でていった

袴 side

あの少年・・・気づいていましたか・・・
まあこれは、予想の範囲内のことです
もしも、これが分からぬのであれば、彼はめだかさんに本当に勝
てないでしよう

「不知火君、本当に彼でいいんだね？」

「はい、彼ならやり遂げられるでしよう」

「毎度思つんだが、その自信はどうから湧こじくるんだね？」

「それは、年寄りの感です」

「やうか」

安心院さんは微笑みを浮かべながらしゃこました

オレは今、ビートルズの曲が聞け?

そう! オレは今 教室の前にいる

アベリーニー

や……やハしよこれ 繁張してきた！
なんてね、そんなお約束なパターンは

オレ王、
葵へようこそを開け

「おはようお姉ちゃん、転校して来た黒田暗示だよ、やめしゃねーー。」

その瞬間、釘バットがオレの頭上から振り下ろされた
オレは、一歩後ろに戻り、避けた

「おいおい、健全な高校生に危ない物向けるなよ」

「なつなぜ避けられた？」

「オレは、前に一度、お前の釘バットで殴られてるから知ってるんだよ」

「何言つてゐんだ? お前とは、初対面のはずだが・・・」

「オレの、
異世界知で別の世界でお前と会つてゐんだよ」

「...」

「は、おもしろいそうなヤツらがいっぱいだな
こりでなら、いっぱい友達が出来るぞ~

トモダチ

イエーイー！！

え？ なんでそんなにテンション高いかって？
それはね、オレに新しい友達が出来そうだから
しかも、さつきオレを撲殺しようとした彼だぜーーー！
何で仲良くなつたかって？

回想シーン入りまーす

「お前俺のこと前に会つたって言つたよなー？」

「ああ、そうだけど」

「だつたら俺のスキルも分かるよなー？」

「そうだね」

「行くぜ、アタックキングフォース攻撃軍ーーー！」

そう言つと釘バット君はすぐ速さでオレを殴つてきた

「イタタツ」

「どうだー！これが俺のスキルアタックキングフォース攻撃軍だーーー！」

「ああ、何度もくらつてるよ。確かに・・・自分の攻撃を瞬間に速くする・・・だっけ？」

オレは、元やかに言った

「な・・・何で笑つていられる」

「そのスキルはもう攻略済みだよ」

「ち・・・ちくしょ」

「なあ、何でオレを襲つたんだ? 何もしてないのに」

「ああ? 簡単だよ、転校生が来るつて聞いたからいつせばりしへ元一回殺しておこうと思ったからだよ」

動機・・・不純だな!!

まあいいや、とにかくオレの友達になつてもらおう

「なあなあ、オレの友達にならない?」

「え?」

「オレ、友達1人もいないから」

「何で、友達がないんだよ」

オレは、友達がない理由を全て教えた

全て話し終えて釘バット君の顔を見ると鼻水たらしながら泣いていた

オレは、動搖した

パラレルズノウ

おいおい！これは、異世界パラレルズノウ知では体験しないぞ！
あの勇ましい顔はどうこつたんだ！！

「俺は、その話を聞いて感動しただー！」

「お・・・おお！ありがとう！」

「分かった、友達になつてやる」

「え、なつてくれるのー？」

「ああ、同じマイナス同士仲良くなつせ

「やつた——！」

と詰つ感じで今にいたるわけだよ

「ヒーリーでお前の名前は？」

「俺の名前は不正怜ふせいれい次だ、お前は？」

「オレの名前は黒田暗示だ」

「ヒーリーで暗示、お前の好きなマンガ雑誌はなんだ？」

「もちろん男は黙つて週刊少年ジャンプだろ」

「やつがやつが……お前もジャンプ派か……！」

とまあ、オレの一回は終了してこつた

安心院 side

僕は今、廊下の天井を歩いている

そして、僕は色々と考え事をしていた
あの暗示という生徒が気になっていた

うーんこれは恋の悩みかな？

なーんてねあんな若造に恋愛なんてするわけがない
それに恋愛なんて、そんなくだらねえ一カスみみたいな感情との昔

に捨ててやつた

さてと、じまじらへ様子を見ねじりひつよ

・・・黒田暗示君

ふあ～あ

おはよう、みなさん！！

今、オレは自分の家にいる

全くいや～な天氣だぜ（ちなみに今、晴れである）

え？普通いい天氣だろだつて？

そうかな～？オレにとつては嫌な天氣だけな

まあ、とりあえず学校の準備をするか

（10分後）

よし！準備完了！！

では、学校にレッツゴー！！

オレは、何気なくいつもと同じ道を歩いていた
その時、曲がり角で誰かとぶつかった

おっ！これはラブコメで定番のパターンでは・・・といふことは女
の子？

そこにいたのは・・・

善吉だつた――――――！

「おっ！悪い！..怪我はないか？」

うん・・・別の意味で怪我をしたよ

「大丈夫だよ」

「さうか、良かった

「じゃあ、オレは行くから

「あつ、ちよつと待てー。」

「何だよ

「お前名前は?..」

「黒田暗示だ

「俺の名前は、人吉善吉ひとよしざんきちだ」

知つてゐるよ

「ぶつかって悪かったな、今度、何かおいらせてくれよ

「いや・・・別にそんなつもりじゃ・・・」

「まあ、さう言つなよ、じゃあなー!..」

善吉はさう言つと、どつかに行つてしまつた

「あつちよ、学校とは真反対の道だぞ」

オレは、さう弦くと鼻歌を歌いながら学校に行つた

学校に着くと今日のことを怜次に話した

「まじかよ、生徒会の奴と会つたのか!」

「ああ

「俺は、あいつらが嫌いだ！」

「何で？」

「俺達の球磨川くまがわ先輩を生徒会に引き入れたからだよーー！」

「ああ、そういうことね」

「そういえば、黒神めだかにアイサツをするのを忘れてた
せっかく転校して來たんだからな
じゃあ、行くか！」

「悪いな怜次、急用ができた」

「何だよ急用つて」

「ちょっと、アイサツ周りに行く

「おひ、分かつた」

善吉 side

俺は、いつもと変わらず庶務の仕事をこなしながら、平穏な毎日を送っている
しかし、なぜか今日だけはいつもと違つ感じがする
めだかちゃんにいたつては、いつもと変わらず生徒会長の仕事をしている

阿久根先輩と喜界島も変わらず仕事をしていた
あくね
きかいじま

球磨川も、いつもの通り「ヤーヤ笑いながらジヤンプを読んでいた
気のせいかと思つて仕事に戻ろうとしたとき

「 もう せんじ ジャンニ ナカト 」

いきなり「デカイ声が聞こえてきた
何だ!?」と思ふ声のする方を見た
そこには、黒田がいた

「え、黒田？ 何でお前がここに？」

「ヤツホー、善吉君久しぶりだね」

「いや、朝会つたばつかだろ」

「何だ善吉、知り合いか？」

「あ・・・うん、朝忘れ物して走って取りに戻らうとしたときぶつかった時に会つたんだよ」

「ていうかお前、こここの生徒なののか!?」

「そりだよ、ちなみに学年は一年マイナス十二組だよ。」

۱۰۰

「そうですね、球磨川先輩」

『あれ? なんでぼくの名前を知ってるの?』

「それは、秘密です」

「ところで何でお前がここにいるんだ?」「

「ん？ ああ、それはね、黒神めだかを生徒会長の座から引寄せり落とすためだよ」

「？」

「あ！ 口がすべつた」

「大丈夫だよ、今日はアイサツだけだし」

何だこいつ？言つてる事が球磨川並だぞーー！
その時、めだかちゃんが

「おもしろい……。二つでも勝負を受けてやる……。」

「あつがとうじゃ、オレは教室に戻るんで」

「おおー待つていろーーー！」

黒田は、みんなに一礼して帰つて行つた

暗示 side

ふ〜緊張した〜

「いや〜良かつたよ暗示君ーーー！」

天井から安心院さんがぶら下がつていきなり言つてきた

「安心院さん・・・」

「ほくは、顔を見直したよ。生徒会全員に大胆発言ーーー！」

「いや・・・あれば、口がすべつただけですよ」

「やつかり？でも良かったよ、球磨川君以来の発言だよ」

「やつですか？」

「やつだよー」

「あつがと“や”れこやか」

「ヒルの壁示君」

「はー」

「一つ聞きたい」とあるんだが

「なんでしょやつ？」

「君・・・本当ここマイナス?」

宣戦布告（後書き）

かなりがんばりました！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7269z/>

負の惨劇

2011年12月25日17時52分発行